



発行所 財団法人兵庫消防協会 神戸市中央区下山手通4丁目16番3号 編集発行人 関山 巧 定価 1部44円 題字 井戸知事

平成21年度 日本消防協会定例表彰式

平成二一年度日本消防協会定例表彰式が、二月一〇日(水)午後一時より日本消防会館ニッショーホールにて盛大に開催されました。

国歌斉唱、消防殉職者に対する黙祷に続き、片山日本消防協会長の挨拶があり、会長から受章代表者に表彰状が授与されました。その後、総務大臣の祝辞、受章者代表謝辞があり、万歳三唱により閉会しました。

本年度は、三田市消防団(関山巧団長)が、本県で一〇年ぶり、六団体目の受章となる消防団最高の栄誉「特別表彰まとい」を受章しました。

- 特別表彰まとい 一団
表彰旗 一団
竿頭級 三団
功績章 四二名
精績章 一〇四名
勤続章 一八〇名



平成21年度日本消防協会定例表彰式

なお、本県の受賞者・団体は次のとおりです。(敬称略)

特別表彰まとい 三田市消防団

表彰旗 姫路市香寺町消防団

竿頭級

神戸市灘消防団 神戸市北消防団 姫路市姫路西消防団

功績章

神戸市北消防団 団長 柵 木 和 明
神戸市長田消防団 団長 濱 寄 爲 司
神戸市垂水消防団 団長 佐 藤 博 司

姫路市飾磨消防団 副団長 桑 名 秀 信
姫路市網干消防団 分団長 肥 塚 勝 弘
尼崎市消防団 副団長 井 内 進

明石市消防団 分団長 石 川 三 郎
西宮市消防団 分団長 清 水 清

洲本市消防団 副団長 中 原 章 晴
芦屋市消防団 分団長 森 岡 忍

伊丹市消防団 班長 矢 野 幸 男

相生市消防団 副団長 福 田 鉄 男
豊岡市豊岡消防団 副団長 河 口 清
豊岡市但東消防団 副団長 田 中 徳 夫

加古川市消防団 分団長 厚 海 正 昭
赤穂市消防団 分団長 和 田 健 治

西脇市消防団 分団長 西 山 徳 久

宝塚市消防団 分団長 松 本 真 一

三木市消防団 副団長 小 野 雅 生

高砂市消防団 分団長 鎌 田 康 司

川西市消防団 班長 今 仲 道 夫
小野市消防団 分団長 内 藤 泰 之

三田市消防団 副分団長 中 後 治
加西市消防団 分団長 見 上 敏 幸

篠山市消防団 副団長 田 畑 幸 生
養父市消防団 副団長 西 谷 洋 一

丹波市消防団 副団長 近 藤 憲 生
南あわじ市消防団 副団長 出 口 智 康

消えるまで ゆっくり火の元 ならめっ子

朝来市消防団 副団長 小 山 泉
淡路市消防団 団長 向 内 良 夫
宍粟市消防団 団員 伊 野 雄 一
たつの市消防団 分団長 田 中 稔
加東市消防団 副団長 小 松 志 津 雄

猪名川町消防団 団員 吉 田 道 雄
多可町消防団 副団長 閑 念 一 裕
稲美町消防団 分団長 田 口 稔 洋

神河町消防団 団長 松 本 日 出 一
上郡町消防団 団員 三 村 勝 章

佐用町消防団 分団長 山 田 徹
新温泉町消防団 副団長 山 本 司

精績章

神戸市北消防団 分団長 岡 吉 尾 仁 実
神戸市長田消防団 団員 辻 井 立 郎

神戸市須磨消防団 分団長 清 水 訓
神戸市西消防団 分団長 須 濱 純 次

姫路市姫路東消防団 分団長 吉 川 裕 史
姫路市姫路西消防団 分団長 岩 本 秀 樹

姫路市飾磨消防団 副分団長 八 木 信 明
高砂市消防団 副分団長 森 田 利 博

川西市消防団 団員 呉 服 太 一 郎

尼崎市消防団 副団長 島 田 幸 司
明石市消防団 部長 岸 数 彦
西宮市消防団 分団長 中 村 和 彦

洲本市消防団 分団長 北 谷 良 三
芦屋市消防団 班長 儘 優

伊丹市消防団 班長 倉 島 正 佳

相生市消防団 分団長 釜 地 英 雄
豊岡市豊岡消防団 分団長 青 田 彌 一 郎

豊岡市城崎消防団 分団長 西 村 正 明

豊岡市竹野消防団 分団長 山 尾 松 夫

豊岡市日高消防団 分団長 田 沼 徹
豊岡市出石消防団 分団長 坂 本 伸 和

加古川市消防団 分団長 今 津 文 明
赤穂市消防団 分団長 織 田 正 樹

西脇市消防団 分団長 河 部 元 一
宝塚市消防団 分団長 林 一 彦

三木市消防団 団員 岸 本 讓 二
高砂市消防団 副分団長 宮 脇 義 文

小野市消防団 副分団長 小 林 崇 浩
三田市消防団 副分団長 前 中 賢 章
加西市消防団 副団長 山 下 奉 治

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英
播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌
福崎町消防団 副団長 中 山 晋

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 後 藤 大 作

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩
佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公
新温泉町消防団 副団長 今 井 寿 史

淡路市消防団 副団長 沖 立 守 廣
朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏
加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

加東市消防団 分団長 川 居 利 英
猪名川町消防団 副分団長 池 田 康
多可町消防団 副分団長 小 林 勉

吉 川 和 利
丸 岡 雅 憲

播磨町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

稲美町消防団 分団長 三 又 健 司

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣
太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩
佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公
新温泉町消防団 副団長 今 井 寿 史

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏
朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏
加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

朝来市消防団 分団長 清 水 雅 彦

宍粟市消防団 副分団長 高 橋 政 宏

加東市消防団 副分団長 渡 辺 達 也

洲本市消防団 分団長 大 谷 康 英

播磨町消防団 分団長 植 山 保 信

稲美町消防団 分団長 藤 吉 桂 児

市川町消防団 副分団長 前 田 義 昌

福崎町消防団 副団長 志 水 陸 規

神河町消防団 副団長 後 藤 健 廣

太子町消防団 分団長 佐 々 木 浩

上郡町消防団 分団長 佐 々 木 浩

佐用町消防団 分団長 谷 口 貞 巳

香美町消防団 分団長 山 崎 清 公

新温泉町消防団 副分団長 高 橋 政 宏

淡路市消防団 副分団長 高 橋 政 宏



「過疎地域における消防団とは」

養父市消防団副団長 上垣 政雄



養父市は県内でも北部、但馬地域の中央に位置する旧養父郡四町（八鹿町、養父町、大屋町、関宮町）が平成一六年に合併して誕生した市で、人口は約二八、〇〇〇人、面積は四百二二・七八平方キロメートル、一平方キロメートルあたり

の人口密度に換算すると六六人となります。

特に私が方面隊長を務める大屋地域においては、広大な山間部に集落が点在するいわゆる過疎地と呼ばれる地域で、各分団の管轄する地域は広く、地元での就業者が少ないため日中の活動人員不足が懸念されており、また少子高齢化の影響による慢性的な団員不足は深刻な状況で、新入団員の確保も難しく年々団員数が減る一方で、団員の高齢化が進み地域の安全と安心を担っている消防団としては、非常に頭の痛い問題です。振り返ってみると、私が消防団に入団した昭和五一年当時（旧大屋町消防団）は、地区内に設置された消火栓の数も少な

く、現在のようには消防車は自動車ではなく、手引きの台車に旧型のポンプを乗せたものが主流で、近年のポンプを始めとするホースや筒先などの備品の新しいハイテク化・軽量化には驚かされる反面、古く使い勝手の悪かった備品で消防活動をしてきた若き日の記憶は、どこか活気に溢れ、苦しい中にも喜びや楽しみが多かったように思います。

地域力の低下が叫ばれるこの時代において、限られた団員でいかにして火災や災害の脅威から地域を守るか、過疎地域における消防団員の背中には、昔では考えもしなかったような大きな期待と重圧がのし掛かっているように思えます。

わがまちの団長さん

「西岡団長を中心に」

新温泉町消防団 西岡 安雄 団長



兵庫県最北西端に位置する新温泉町は、平成一七年一〇月に合併した風光明媚な海・山の自然と温泉を有する町です。

新温泉町消防団は二二分団、七四九人の団員で地域住民の生命・財産を守ることを使命として活動しています。

西岡団長は昭和四四年に旧浜坂町消防団に入団し、様々な水災に出動して活躍され、副団長（平成二年四月）を経て平成二〇年一二月に団長に就任されました。

温厚誠実、気さくでとても優しい団長です。穏やかな中にも厳しさをもち、団員の規律や訓練においては特に厳しく、消防団員として誇りと絆を大切に

消防団今昔

66

「消防団今昔」

播磨町消防団団長 田中 廣治



我が播磨町は古くは一寒村、四ヶ寺、三〇戸で、主に農漁業の村でした。明治四〇年に阿閉消防組として発足、のち警防団と改称。昭和二二年、阿閉村消防団となり、一団一分団、団員三五五名でした。昭和三七年の町制施行により県内最後の村「阿閉村」は「播磨町」と改称され「播磨町消防団」となりました。現在は、平成一八年に女性分団を新設し、一団二分団、団員三六五名で組織してい

ます。私の入団は浅く六年目ですが、消防歴は長く四七年になります。昭和三五年頃は消防自動車の起動もキックハンドルを使っており、消防車の座席も隊長と機械員の二つのみで、隊員は後方及び横面のステップに刺し子を持って乗車し、着装しながら火災現場に急行。サイレンや鐘もロープとハンドルを使った手動で鳴らし、交差点の一時停止等、ほとんど無しで走れた時代でした。

今年には阪神淡路大震災から一五年目の節目の年です。死者六、四三四人、全半壊家屋二四九、一八〇棟、焼失家屋七、四八三棟という人知を超え大なる自然の力に慄然とさせられました。私はこの震災の体験から多くの教訓を学びました。一つは初動体制の重要性です。常備消防の駆けつけ時間にも限度

があり、災害発生時は家族や近隣住民の人達が地域防災力の要となります。人命救助や消火活動は普段のコミュニケーションや情報収集が大切です。二つ目は訓練の大切さ。有事の際の即戦力と体制作りには、住民一人ひとりの「常に危機感を持つ」の訓練参加姿勢や消防団の日頃の訓練と使命感が重要です。

さて、私達消防団は住民の生命、身体及び財産を災害から守ることが使命です。近年私達を取り巻く状況は大変厳しく幾多の課題もありますが住民の安全安心や活気のある町づくりには一層の努力が必要と考えます。住民から信頼され、地域防災の要となる消防団を目指し、時代にふさわしい消防団作りを邁進していく所存であります。

平成一七年一月、多可郡内の三町（中町・加美町・八千代町）が合併し多可町が誕生したことに伴い、消防団も多可郡の三消防団が統合され多可町消防団として生まれ変わりました。多可町消防団は、一四分団六七部、団員数一、二〇一名で多可町内約二四、〇〇〇名の住民の安全安心を守っています。多可町消防団では、平成二一年一〇月一八日（日）多可町八千代区にあるガルテン八千代グラウンドにおいて、多可町消

多可町消防団長査察を実施

多可町消防団

多可町は兵庫県の内陸部に位置し、周囲を中国山地の山々に囲まれた多自然居住の町です。気候は、瀬戸内気候の影響を受けて穏やかですが、町の北部一帯は内陸性気候の影響を大きく受け、かなり寒暖の差があります。

平成一七年一月、多可郡内の三町（中町・加美町・八千代町）が合併し多可町が誕生したことに伴い、消防団も多可郡の三消防団が統合され多可町消防団として生まれ変わりました。多可町消防団は、一四分団六七部、団員数一、二〇一名で多可町内約二四、〇〇〇名の住民の安全安心を守っています。多可町消防団では、平成二一年一〇月一八日（日）多可町八千代区にあるガルテン八千代グラウンドにおいて、多可町消

防団長査察を実施しました。この消防団長査察は、合併以前には多可郡の四消防団で結成する多可郡消防協会が、多可郡消防協会会長査察として隔年で全国消防操法大会のない年に実施していました。しかし、合併を機に一時中断していましたが、今年度六年ぶりに消防団長査察として復活したものです。

当日は秋晴れのもと、多数の来賓にご出席いただき、八千代区の団員約三〇〇名による分列行進・車両行進、観閲、小隊訓練、婦人防火協力員による初期消火訓練、消防署との合同での建物火災を想定した救急救助・消防訓練を実施し、また、八千代北小学校児童による鼓笛演奏で会場に花を添えていただきました。特に小隊訓練では、精鋭三〇



団旗並びに部旗の入場



消防団・消防署合同消防訓練

名が各個訓練、通常点検、行進間における方向変換及び隊形変換等の動作を見事に披露し、会場から大きな歓声が起りました。小隊訓練をした三〇名は、約三ヶ月にわたり休日や各自の仕事が終わった後の夜間に訓練を積み重ねていきました。隊員にとってはこの大舞台で訓練の成果が出たことが大きな自信となり、今後の消防団活動にも多大な影響を与えることだと思います。また、会場には隊員の家族も来ており、夫や父親の勇姿を見て、普段何気なしに感じていた消防団活動が少し身近なものになったのではないのでしょうか。

近年、ゲリラ豪雨と呼ばれる局地的集中豪雨等、以前では考えにくいような災害が各地で多発しており、また、近い将来大地震の発生も懸念されている中、消防団は地域の安全安心の要といえる存在であり、地域住民の心のよりどころとなるべき存在です。我々多可町消防団は、今後も訓練を積み重ね、全団員が一致団結し、地域住民の安全安心を守るため日々精進していきたくと考えています。

に町当局に進言しています。本年度は消防車両・防火水槽を大幅に更新することができました。また、訓練や式典についても、団員意見を大切にされており、消防団の伝統を大切にしながらも団員のために新しい試みの採用や改善に努めています。団長は新温泉町防犯協会の会長も務めておられ、地域住民の安心・安全のために多忙な毎日をお過ごしおられます。優しく、行動力のある団長を団員は尊敬し頼もしく思っています。

これからも西岡団長を中心に、町を火災や災害から守っていきます。

「消防団に入団して」

加東市消防団  
第九小隊黒谷分団

頼金 幸雄



私が住む加東市黒谷は東条湖の  
下流に有り、大自然に囲まれた  
地域です。  
その自然を利用して別荘や商  
業施設が建っており、多くの  
人が集まる為、消防団の役割は

り重要なものとなっております。  
しかしながら、わが地区でも  
消防団員の確保は年々難しく  
なっており、私が入団した三年  
前から新人団員はいない状況で  
す。

昨年七月に、「喫茶黒谷」と  
いう老若男女問わず集まる行事  
の催しを頼まれ、地区の皆さん  
に今一度消防団の活動を知って  
もらおうという機会がありました。

その時の内容のひとつで、小  
型ポンプを使い放水体験をして  
いただきました。

団員が補助をして筒先を大人  
の方に少しの間持つて頂いたの

ですが、凄い圧力に驚いておら  
れました。  
また、消火器の使い方の説明  
もしました。女性や子供を含め  
ほとんどの参加者に水消火器で  
の噴射を体験してもらえまし  
た。

消防車との記念撮影やダーツ  
ゲームなども交え、とても良い  
交流が出来たのではないかと思  
います。

消防団は火事の時だけ出動す  
るものではありません。祭りの警  
備や地域の見廻り、災害が起  
こった時といった住民の方の安  
全、安心にはまさになくてはな  
らない存在です。

また、他の地域から移り住ん

だ方でも、消防団に入ること  
で活動を通して顔を覚えてもら  
え、単純にして素晴らしい活動  
ではないでしょうか。

私自身、同じ旧東条町の出身  
で、子供の頃からこういう活  
動を見ていましたので、違和感  
なく入団出来たのではないかと  
思います。

このような交流を通して消防  
団を知ってもらおうということ  
が、とても大事だと改めて実感  
しました。

地区の子供たちが大きくなっ  
た時、団員に加わってくれるこ  
とを願い、これからも住民の  
方々の消防団に対する理解を深  
めて行きたいと思っています。

われら若手消防団員

26

「消防操法に学んだこと」

洲本市消防団  
由良上灘分団

相田 浩希



私は、平成二〇年に洲本市消  
防団に入団しました。消防団の  
存在については、入団以前から  
知っていましたが、まさか自分  
が入団するとは思っていません  
でした。入団するきっかけは  
地元の先輩から入団の誘いが  
あったからです。

入団してすぐに分団長から、  
洲本市消防操法大会へ出場して  
みないかとの誘いがあり、私は、  
入団したものの消防団の活動に  
ついて全く知識がなく、実際の  
火災現場でどのように消火活動

をすればよいのかも知りませ  
んでした。操法大会は良いきっ  
けになるのではないかと思います。  
大会へ参加することにしまし  
た。大会の二ヶ月程前から練習  
が始まりましたが、最初の練習  
では、チームメンバーの顔と名  
前を覚えるくらいが一杯で、  
整列の仕方やホースの伸ばし方  
など、一通り教えて頂きました  
が全く覚えることが出来ませ  
んでした。練習は週に二回程あり、  
仕事終わりに練習をすることに  
なるので、ホースを担いでの全  
力疾走や、放水時の水圧に耐え  
なければならぬなど、体力的  
にも精神的にも非常に大変でし  
た。ですが、最初はただただ苦  
痛でしかなかった練習が、回数  
を重ねるにつれて動作の仕方も  
徐々に覚えられるようになり、  
「次はもっと早く、もっと機敏  
に」と考えるようになり練習が  
楽しくなってきました。

大会本番は、他のチームが完  
璧に動作をこなしていく姿や、  
大勢の人に見られているとい  
うプレッシャーで萎縮してしま  
い、練習では出来ていたこと  
が思うように出来ませんでした。  
案の定、私のチームは良い結果  
を残す事ができませんでした。  
私は非常に落ち込みましたが、  
そのような姿を見て分団長が私  
に「入団して間もないのに、こ  
こまで出来たのはすごい。今回  
は基本動作を覚えられたと思え  
ばそれで十分。」と言ってくれ  
ました。私はその言葉を聞いて  
二ヶ月間頑張ったことは無駄で  
は無かったのだと実感できまし  
た。

大会後は、幸いにも出動しな  
ければならないような火災等は  
なく、私は未だ実際に消火活動  
を行ったことはありません。実  
際の消火活動は操法大会のよう  
に決められた動きをすれば良い  
ということではなく、臨機応変に  
動かなければならず、戸惑うこ  
とばかりだと思いますが、操法  
大会で身につけた基本動作を忘  
れず、自分の住む町のために消  
防団の一員として活動に従事し  
ていきたいと思っています。



1番員で出場した平成20年洲本市大会



北から南から

「御食国淡路島の新たな食」

洲本市消防団

遙か万葉の時代より朝廷に食  
物を献上していた「御食国(み  
けつくに)」。淡路島。幾世紀を  
経た現代、わが国の食料自給率  
がわずか四〇%である中、淡路  
島の食料自給率は一〇七%を誇  
り、長い歴史を積み重ねてきた  
淡路島の食材たちは、今もなお  
多くの人々に愛されています。  
淡路島が遙か万葉の時代から現  
在まで培ってきた「食の系譜」、  
これを活かした新たな取り組み  
が淡路全島で練り広げられてい  
ます。

ての定着も図られてきていま  
す。淡路島牛井(淡牛・あわぎゅ  
う)は、日本一の味といわれる  
淡路島の「たまねぎ」、日本を  
代表する神戸牛や松坂牛の素牛  
であり、その歴史、品質ともに  
最上級を誇る「淡路牛」、淡路  
島の豊かな自然と水、そしてき  
れいな空気が育んだ古来より良  
質米として知られる「淡路米」  
といった淡路島が誇る「こだわり  
の食材を使用した牛井で、淡路  
島内の五二店舗が参加し、個性  
溢れる牛井を提供しています。

「淡路島ぬいどる」はじめまし  
た。

淡路花博二〇一〇「花みどり  
フェア」も開催されます。

淡路島特産の手延べそうめん  
を改良したオリジナル麺とタマ  
ネギを使うことを条件とした  
「淡路島ぬいどる」の販売が、  
一月二日から淡路島内三三の  
飲食店やホテルで一斉にはじま  
りました。炭火で焼いた淡路穴  
子を丸々一本使った「ぬいどる」  
や鯛でだしをとった濃厚スープ  
のつけ麺、淡路牛とイノブタの  
ミンチをミートソースとして  
使ったスパゲティなど、各販売  
店の工夫とアイデアが詰まった様  
々な「ぬいどる」が楽しめます。

淡路島牛井は、各販売店  
の工夫とアイデアが詰まった様  
々な「ぬいどる」が楽しめます。



淡路島牛井

立春とはいうものの、まだ  
だ肌寒い日が続いております  
が、皆様いかがお過ごしでし  
ょうか。

さて、今月号では平成二一年  
度日本消防協会定例表彰につ  
いて掲載しております。また、各  
地区より多数寄稿いただき、あ  
りがとうございました。  
空気が乾燥し、火事が起こり  
やすくなっております。暖房等  
の火の気の取り扱いには十分に  
注意したいものです。

編集後記



「こんにちは！兵庫の消防団です」



http://www.hyogoshoubou.jp/